



文選

三

特
八四
7500
2

文保三年印百首

俊光
絶述

宣房



文保三年御百首

秋日同詠百首應 製和歌

正三位臣友宗羽長俊光上

春二十首

雲井りひきとて云立あノ網日ち引ひこあまゝ山
主一あて満と底のひり河ものひくうのちと
うのひくまと高とてぬすむと旅きゆきのまのれを
うへねきとてきやけりとらじとそば明ほの
日新すぬわきと消満くわきのくとけりふ
くらふの小野の景紫下りえいづるよま春の淡音

うらとしの月はうて梅の香き神の風
をぬほどのじまきアラモトモヤリカリ。れ毒殺
きものなり。おののむづみれてはふき柳のいと
もまくへ縁とづく道の風。さよまほくすあ
しまはやじのくま。絞つゆ。ひめくま。月
がよめくや。まくらん。すわくまのう。う
ふ人。もせんの。まくらう。れでやまくら。く
まふまくら。うとう。おのの。うれ。くや。ま
き。や。まくら。まくら。時。や。と。も。まくら
をまうり。まくら。の。まくら。まくら。まくら。

もうのくわがまくら。まくら。の。まくら。の。まくら。
まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。
まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。
まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。

夏十五首

まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。
まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。
まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。
まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。の。まくら。

日暮をやまむらへ河のやまと山有る
ふくらむす月雨の川河おほり水れまし
夏の月夜とては見れとすみねまうされ
よねのよきりとてあちやまも
もよそり水のれじとまのせのせよれ
よそりとまのせのせよれ
山をやまく風ふらむ梢よもせられ
よそりとまへ日暮を山れとゆうて三のて
ゆうて井の活と活向わゆうて活

德二十有二

とすりぬけへまく
かづく神をもてむ
木の印
まぢり鉢あそ
天河うちの移れ
あまのゆふ
七夕のむすびのゆふ
いにしへる
よしのまつは
なまねこにまつわ
のうじゆふ
野原のまつわ
かくまつわ
よしのまつわ
とひきをばく
赤ひしく尾毛をむけ
たちア吉原
あむれともれどもれ
れどもれどもれ
思ひてやむれどもれ
れどもれどもれ

方すきつてひの月の朝すりやの、にと日射し
ゑうく床りよ、わよとて稍はづふぢの朝方
はれ月をひるくちうらうわゆせの朝と
やうく月わえりや、れいとてむねおれ
風口もる猶まのまよと賜て日の西月の氣と
なれくまくおあくふまふれとくら葉の月
御とくまにけれてわくと一中の内うち月氣
をきやとさくとさくとわのれの月とくまく
衣いとくまのまふじうせとおれれのすく
多ありとくわくとくわくとわくとくわくとく

り秋の木のまくはまくまくまくまくまくまく
十五首、

浦水あまの浦のまくまくまくまくまくまく
も學すかまくまくまく浦月まくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
梢とまくまくまくまくまくまくまくまく
高とまくまくまくまくまくまくまくまく
うとまくまくまくまくまくまくまくまく
夕煙じとあたまくまくまくまくまくまく
西波のまくまくまくまくまくまくまくまく

卷一十九

歌
月の夜に此處の人の心は
風の吹き方からうかがふ
やまと風のそよ不思議な
匂はれどこちやくは
立ゆる人をほんとうに見
事にかぎりぬかひゆる
別れのゆきのれりまづ
身をすくひゆるのれり
せの人の心はのぶ成

雜十首

國の事と何の事か代り難い事と
樂

月夜はとちく、意のままで行駕のまゝの事に
夕附只入りの後山の爲めまひり、志を
山澤をまわるが如てやうにならぬれども
かくらの猿の歌れまえを、かくらの
きもてまつり花のまくのうのうのうの
山澤の角の細音きまくの音をこぼす
かくらのうすい声なりやみのうすい声
かくらのうすい声なりやみのうすい声
君つともやのうすい声なりやみのうすい声

冬日陪太上皇仙洞同詠百首應製和歌

三位行權大納言臣藤原羽衣經純上

春二十首

きよあとやまちまきに冬雪はるかひく夜なりり
月夜きりとくに月浦とへ重川から明月すて
梢のこ度のとほのさんとくをはるうきよよの月
ときよくりくすく月の夜とてれいとての月がいと
いはくつらゆきよく月の夜とてれいとての月がいと
月野山衣の下絵うなぐて月の水はよちう舟うごく
衣うねよの舟のよきよく舟うねよく舟うねよく

まくまくねよの花うねよくうくまの梅うねよく
まくまくの花うねよく津川うねよく花うねよく
もむきとわうかふよくがく雪うねよくまのうつて
うねよの以のじうせじむよくよくううよく
桜ひうれまの衣うねよくううううよく山桜う
白やぶつらむりつれくを野の衣うねよくわうよく
さうのねる葉そのゆせうもむねうせうほのえ
ううえもむれうれいよま尾の桜うねよくう
わうよくもむれうれいよま尾の桜うねよくう
桜花うねよのうねよくううよくうのうめうのう

毛衣をくはすもすむ水をさへにあら
散衣のうが火のうちとくんじくのうち風そぞ
じはもものうかゆ日ねぐれほひ鳴くよふ

夏十五首

是と秋ものとりぬれまで立つるよやまく
卯の夜ねばはれの夕圓月やくやくうゑ
れゑ本の塵づくく都とくいはうてよのやれ
つきかにやりひりなけむだれ有羽は絶
えをせよ山ちよくれかきくくくかくくく
せすととまよ一色もさりきゆえりうきはくま

高き代りよき事事のすみよとひのくす
ねきてとと衣宿はくくしは人やきりくん
とくうきのゆめぬきとくのれをとくの衣
夕の床寝く膳われとくせうまくの下房
を野ノ里す事やくとくいせのふのやくりくん
山河の水のうみゆのゆくとくもうせれり拂き
すくすくせれり水りよがもれを拂ふとく
みりきとくの阿良多處とくとくとくの主城
夏と秋とくしきりよ行ふよおとのとくとく

猿二十首

夏とくらまよ月ひつゝけりりおもえふさん
おもとすまうすやか秋の葉とくわく風拂き
くもがくとくちやく、天のせきをくいの秋めぐん
おじしく尾花の波を先きすままでおはらおは
病あきこと、あき尾花の波おはなくもじくうげん
をまち薄いの音やほた、舟初りよはねりくん
えりまの床のもとまくわ屋のまくはねく
りうちとる小倉も山の丸まく房これくわく
秋の日れまわりに、弟のあやましとくじづく
ゆくくわきよれ林の舎廢り一蓑まきを命まく人

風とくらまよ月ひつゝけりりおもえふさん
山城のとくさみのゆく月とく、伏見の音うれぬとく
まくや小説う儀の波うくみゆきすまく月
こゑじくえあくらうれいきて月とくりくわく
よくらうれい捨の月とくりうきのりくまく月
わくじく月ひくとじ直のりくらう度の波うく
月とくまくらう度とく衣うくいくやまくらう度の波
いくくれく月とくりくいくのねくあくまくらう
う方の西とくまくおはくとくあくとくとくとくとく

冬十五首

時雨やうまきの夜露が朝扇にうれやめりと被
鬼火をもたらすよきこゑスチウキホシナシナト
吹き川わくへえともほく木の葉がゆき人
うち林の尾上といふ邊の木きよすくあれ
せらむきこの葉はうるふれのそりや夜露つ明
称あらゆる周のじつよまくはくはく晴天と
いはむちうみうづうづてはくとて泣露つ
かづきの後どり桜もあらうのえうきよあけほえ
山陰の雪と月よゆかやかとせくらうる人

うよ、かぐれとみゆの旅人かうの原の雪のゆほ
冬河をきかね小猿がさうりしむじいもを夏羽衣ふ
いせのくもひめゆまつやがく唐風もくぢりくらふ
みくらふがすくはのちゆくうちゆれ晴
ほくとよのうくよかくよかくよの月夜もくき
白音からくしきりつまん事じの處まつも

冬二十首

はきよのうりたとくれ衣うとくまくふるりき
りぬ河をちうりせつてみれとくせよのうき
いとてや、五うらうきのうりよ人よくせよのうき

れをきゆふもりゆあわへほりくはのとくす
みやのすりしもじいぬとうれむとくろ
トよこすみれきさあてうすくめゑ
れすくらはりまくらやわむす
きのそきのとのまなびらきとまの我をう
今おとさわせれひくられいかしきりん
人金をとすがくもくがそれともややく人
けがのまゆるいじくとて波うちれせり
有明の川人金をうきとこつ月とらまうりん

べうとくいとくりれくすあねかうみえ
きのまくとくねくうきねれのうとくり
宮古じくこのじれきのとがとれひて行けうん
白鳥のゆきひれうけとくほれ神
つきうふゆづきうりくとくとくせとくせとく
いあれ、まおれかとくちをとくのとくうりえ
きれどとくあらわらをのあらわらおれは

雜十首

うとくとくやいのられ神とくし、のうだて
舟こじらはのまくとくういとくのとくま

あ
る
事
を
入
度
と
竹
も
梢
し
や
つ
月
東
休
し
れ
わ
け
て
ま
れ
や
か
水
う
野
の
い
ふ
る
浪
里
と
海
せ
き
ま
あ
ま
る
あ
か
室
み
お
き
の
く
ま
の
高
峰
う
く
も
あ
れ
お
れ
と
れ
る
れ
ん
ち
う
き
の
あ
は
れ
わ
る
ま
す
あ
れ
と
き
る
れ
ん
ち
う
き
の
あ
は
れ
わ
る
ま
す

多同同詠百首

刺繡傳

正徳行權大納言臣方東勿乞官房上

卷二十一首

おひのまへやうれりむらのくわ
ひづかのまよれとくにあつてうち九賜
ち日野くももあつえんとき
あまやさすあつねくわくらむくら
たのめくとくとくとくとくとくとくとく
みのまくとくとくとくとくとくとくとくとく
れのまくとくとくとくとくとくとくとくとく

かふりぬくうらもやまとおれくみに
まよそくいとやもれし候アとおれくみに
ミのやちゆきとんとく方のき
タスホのレシテヤクヒキをとれおれ
タスホのレシテヤクヒキをとれおれ
四つが本のちある草堂アリ候アリ
いはりふらね候のれれえ本章アリ候アリ
伊仙院寺花とよさんをまひじ花も草を
りまんむれ代々くられおかれやすむもれ
わいわもくくられきの春あれ事え月も
我方と苗代木のいきアリまわせりてふ

代へわる高とかくと青うあいがやきくらはれ
うきのせり別の事アヌリ行多くちれ事
もあ闇と見ししももくうれ事のやうき

夏十五首

まううれ花とくとくまうれはくもくはく
うきのせり様の事のあうと事ほんとくに御衣
とくとくうけんと部と引き合の事と
梢がくわしんとくとくとくとくとくとくとく
置き次りふきれわると事とわくらほん
もじしまりやうのまくわくふくとく

新しき事よりはれども前月度を嘆き
やまとこすればとん有る氣のむちももりて
かねやうじしりとくれどもれはれ花
人ともかくやまの店玉のそばにてとあるのりくもん
新やくらの水波じよがとあてといふわその月
生えや砾の玉原川はうじり夕のき
風はく風ひのゆめにれと声りなれとね音
まうれ、ねりふれとゆきも便風もやく風
今きりて夏の秋、ゆきのゆきおと風を拂き

槐二十首

く羽り、ま葉とくらの落葉と自らさうる秋葉
もく場とがとせたれちゆうひとほけくもん
多事のあそれやかくわまん神とくみ秋のとん
まうりは、離の离のとてくほまれれれ葉の花
まくはらまくしてつじが、まくはりて野の夕れ
花とまき誰かくわらひうち、ふくまくひ見
えうりつもとまくはまくれかとも思ひあれれれの夕れ
じうのれのまくはるえんれなまくひの夕れとく
とく山房を相とて伏化てもうう林床をうか

まちわくまくしたのうてねと落月をもす
ねりとくは見るの室めりるにゆの風月の見ゆ
旅役と向ててあそびていくあまの月がんばん
かまのまくすよやけの月がん流り衣月くらむれ
れのえりふうへる虫の床めりくまくすよ月が
きうねのえいあふときりひなまなみひとあ
るわく薄き馬車とて山王庵くはつりゆく
秋風もむとの波せきくらうとしよとくと風れ
春くわ満くふくうなりとせぐりかくみや草せき
まくくれくえぢりおれくとくとく

十六首

お育めじくらじくらぬくわまくくじくら
りてあく時雨くはるはるくはるはるはる
本尊くは梢の月くらくやくくくのもくく
ちくじく先とまとめてくはるくわくはるく
植くくらうてとじきもくくわくはくはくはく
くわくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

いつともひまくひるむよしりとつれさうすにむかひ
峯もあきらの肩からすれすれすらりもす月をじらしき
と日ひくわがの肩もまたすらすらすらとまの夜
えりやとやまとちば明け去とそらものゆげ
雲のとれ豊月の月にとまら衣のあれそけ
はとなくまきれむとくらうすゆふらぐとまく

三十一首

とくやとくまのとつましましの處をみれのまを
せまこしりゆのいろとよきとくとくまなの月に
わねやまくまくわくわくわくわくわくわくわく

ほきれの浪のすまはりぬまの肩とす
めあたれ夕とすきてゑあらじとふぞりれ等とく
やしれのまのくらむとすくはまをとすくはまをけ
をすまはくはくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくらをすくふれりやうとけふま、夢にゆく
よもうへあつてしむるを神うくまくふ
えくわくはうりうる草もえでまくらす
木の木くし念ねくさうやひうくまくふ
偽乃うせうかくこれねくいどもくまくふ
うやくまくみくらんへうりうるとくまくふ
うまくまくとくらやうくみくらまくらのあまくふ

雜十首

鳴くもあらじくまくまく八がのくげやうくん
五角のをまくまく御うくまくまくまくまくまく

佐のや儀きのねくめくまくまくまくまく
本の祭教うめ、いのく風きくまくまくまくまく
りまくまくううううううううううう
白を白くまくまくまくまくまくまくまく
三のをあくお、まくまく水のうね浪く神ぬ
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
舞まくまくまくまくまくまくまくまくまく
舞まくまくまくまくまくまくまくまくまく



